臨床教育学講座98年度授業科目一覧

■臨床教育学研究（皇紀夫・矢野智司）

臨床教育学と臨床教育人間学の基本的文献、古典的文献を精力的に読む。また、博士論文作成に向けての指導を行なう。

■臨床教育人間学特論Ⅰ（矢野智司）

遊びの教育人間学 ── これまで子どもの遊びは主に発達の観点から捉えられてきた。子どもの遊びは、いずれは成熟して仕事や労働へと移る過度的な事象にすぎず、成熟を促すのに必要な意義を持つものとして理解されてきたといってよい。そのため遊びは体を丈夫にし、集団のルールを学び、認識力を発達させるのに役立つといったことが、遊びの教育的機能として取り上げられてきた。しかし、子どもの遊びは、そのような教育的機能に還元できない人間にとっての根本的な事象の一つである。世界と全体的に交流し新たな意味が生成する瞬間に焦点を当てながら、子どもの遊びの真相を捉えてみたい。そのため、Ｊ・ホイジンガ、Ｒ・カイヨワ、Ｅ・フィンクらの遊びの古典的テクストを手がかりに、遊びについての議論を深める。

■臨床教育人間学特論Ⅱ（西平直：東京大学大学院助教授）

ライフサイクルの人間学：アイデンティティとライフサイクルをめぐって ── 〈発達の思想〉と〈輪廻の思想〉を対比しながら、アイデンティティとライフサイクルをめぐる理論的パラダイムを検討してみたい。前半は、Ｅ・Ｈ・エリクソンの理論を基礎に、「心理学的」検討。例えば、Ｃ・Ｇ・ユングの個性化論。ヒューマニスティック心理学の自己成長理論。トランスパーソナル心理学の意識発達論、など。後半は、円環的ライフサイクルの思想の検討。例えば、Ｋ・ウィルバーの意識発達論『アートマン・プロジェクト』。Ｒ・シュタイナーの「霊的再生の理論」、など。集中講義のため、参加者と相談しながら、授業を進めることになるだろう。参考までに、拙著『エリクソンの人間学』（東京大学出版会　1993年）、同『魂のライフサイクル ── ユング・ウィルバー・シュタイナー』（東京大学出版会　1997年）がある。

■臨床教育学特論Ⅰ（皇紀夫）

臨床教育学と「心の教育」── こどもの生活世界において理解困難な出来事が出現すると、それらへの教育的な対応策として「心の教育」が（学校）教育の課題として登場してくる。この傾向は、カウンセリングマインド・ブーム以来の教育界のひとつの反応特性であるといえるだろうが、では、一体「心の教育」とは何を意味しているのだろうか。教育界はこの口当たりのよいスローガンに悪酔いしていないかどうか、問い直す必要があるように思う。本講では、教育（学）において「心」を語る場合、その言説の仕組みはどのようであるのか、あるいは、教育学は「心」を語ることによって教育の意味領域をどのように広げることが出来るのか、という問いを基調にして、昨年度手掛けた、仏教言説における「心」の語り方の考察を更に展開して、「心」を語る言説の特質について考えたい。

■臨床教育学特論Ⅱ（今井康雄：東京都立大学助教授）

ベンヤミンの教育学的アクチュアリティ── ヴァルター・ベンヤミン（1892－1940）の脱領域的な思想は、美学や文芸批評はもとより、メディア論、都市論、歴史理論など、様々な領域でそのアクチュアリティが確かめられつつある。本講義では、子供論を中心とする彼の「教育」論もまた、今日の教育認識に直接訴えかけるものを持っているのではないか、という見通しに立って、ベンヤミンの思想の教育学的アクチュアリティを検討していきたい。アプローチはいわば二正面作戦をとって、彼の提出した様々なアイデア── たとえば、経験の貧困、メディアに浸透された知覚、政治の美学化、等── を、一方では現代的な視点から、他方では1910年代から30年代にかけてのドイツ及びヨーロッパという彼の思想の歴史的・社会的文脈から、検討することを試みたい。

■臨床教育学演習・臨床教育人間学演習（皇紀夫・矢野智司・田中毎実：京都大学高等教育教授システム開発センター教授）

子ども世界の理解── この授業では「子どもの生活世界」研究を主題として、身体、ことば、遊び、病等の個別現象に関する文献研究を継続的に進めてきた。その場合の方法論上の共通点は、解釈学あるいは現象学的人間学の立場であった。このような方法論を継承して、今年度は、子ども自身が作り出した作品世界や子どもに関する言説が開いたテキスト世界などに関心を向け、「子どもという人間の在り方」の意味とそれをめぐる教育学の解釈の仕組みについて検討をくわえ、これまでの継続的な研究に一応の総括を施すとともに新しい研究

主題を探りたい。本演習は論文指導を兼ねる。

■学校臨床学演習（皇紀夫）

臨床教育の方法と実際 —— 教育や学校や教師あるいはこどもに関する最近の基礎的な文献を読んで検討をして、我が国の教育事情への理解を深めるとともに、教育「問題」の所在に対する問題意識を鋭いものにする。また、学校での「問題」や相談の事例を取り上げ、臨床教育の実際的な課題について検討する。

■臨床教育学課題演習（皇紀夫）

解釈学とレトリック：「臨床」の意味を考える —— 解釈学の考え方から臨床教育学の立場を展開する試みについて、幾つかの観点からすでに本授業で検討してきた。今年度は、教育の「問題」を語る言説の様式を解体・再構成する技法についての知見を深めるため、解釈学とレトリックに関する国内外の文献を精読して研究討議を進めたい。

■臨床教育学講読演習（矢野智司）

J. Dewey, *Democracy and Education* は、プラグマティズムの教育学者Ｊ・デューイの教育学上の主著であるにとどまらず、20 世紀で最も影響力をもった教育学のテキストである。そして、このテキストは現在でもなお教育学的思考を方向づけており、さらにポストモダンの教育学の試みにも豊かなアイディアを提供してもいる。今年はこのテキストを講読する。このテキストは大部であるため、翻訳の『民主主義と教育』（岩波文庫）を平行して使用して、デューイ教育思想の概要の理解を図りつつ、重要な箇所を英文で精読することにする。

■身体教育学（矢野智司）

身体の教育人間学 —— 教育は身体に働きかける。このとき、教育のタイプをシンプルに二つに分けて考えることができる。一つは社会的な技術を身体に植えつけることである。歩くことから規律・訓練までそうだ。そして従来の体育が目指していたものも、身体文化の伝達として、このタイプの教育だった。もう一つの教育のタイプは、共同体向けの身体技法を形成するのではなく、反対に、身体を宇宙へと開くことである。修行やダンスやスポーツはこのタイプの教育と結びついている。教育と身体との関係は奥深い。また病気やファッションといった身体論の諸相について論じる。参考書：作田啓一ほか編著『人間学命題集』（新曜社）

■臨床教育学基礎演習（皇紀夫・矢野智司）

子どもの世界 ── 現在の子どもたちは、どのような世界に生きているのだろうか。子どもの生きている世界を生きたものとして理解することは簡単なことではない。たとえば、子どもの遊びの世界は、たまごっちやポケモンの流行にみられるように電子メディアによって大きく変容を受けていると言われる。しかし、これを遊びの世界の縮小や堕落と見るのは一面的である。ここには、子どもの驚くべき世界が切り開かれてもいるはずだ。あるいは、子どもの暴力は近年大きな問題となっている。しかしなぜ暴力は起こるのだろうか。学校が悪いからだろうか、近代教育制度が原因なのだろうか。むしろ、子どもが大人になるというプロセス自体の中に暴力を不可避とする生の秘密があるのではないだろうか。教育の常識を洗い流し、子どもとともに生きる在り方を探っていこう。授業では、子どもについて基本的な文献を読みながら、文献の読み方、発表の仕方、レポートの書き方を学ぶ。

■臨床教育学専門ゼミナール・臨床教育人間学ゼミナール（皇紀夫・矢野智司・田中毎実）

臨床教育学演習を参照。